

希望表現史小考

—「源氏物語」の「ばや」を中心に—

森 脇 茂 秀

1、希望表現形式

次の例は、『源氏物語』の用例で、光源氏が少女(紫の上)の素姓を聞いた場面の一節である。

・さらば、その子なりけり、と思しあはせつ。親王の御筋にて、かの人にも通ひきこえたるにやと、いとどあはれに、見まほし。人のほどもあてにをかしう、なかなかのさかしら心なく、うち語らひて心のままに教へ生ほし立てて見ばやと思す。

(若紫(1) 287頁)

ここでは、近接した場面に希望表現「見まほし」「見ばや」が用いられているが、この「見まほし」に対して

「新大系」脚注には、「逢つてみたい。妻にしたい。次頁一行目の「見ばや」も同じ。」とあり、意味的には差異がない、とする。確かにここでの「見ばや」は「源氏は自分の思いのままに教え育て、紫の上を妻にしたいものだ」とお思いになれる」と解釈でき「逢つてみたい。妻にしたい。」という意からすれば、同質のものであるう。『源氏物語』には、「まほし」が先行し「ばや」が出現する例が、あと一例存する。

・母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、(典侍)「いとよう似たまへり」と典侍の間こえけるを、若き御心地にいとあはれと思ひきこえたまひて、常に参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ。

(桐壺(1) 120頁)

光源氏の臣籍降下が行われ、源氏が亡母に似ている藤壺を慕う場面で、ここでは「いつもおそばに参りたい、お近づきになってお姿を拝していたいものだ」というお気持になられる」と解釈できるであろう。

このように近接した場面に希望表現「まほし」「ばや」が共に用いられているが、「ばや」に着目すれば、両者とも「ばや」は文末に位置し、「思す」「おぼえたまふ」という心理動詞が後続しており、「ばや」は心理文中に用いられ、且つ「ばや」と引用節を承ける「と」が直接承接し「ばや」となっている点が共通している。

平安時代の希望表現の概要については、築島裕（一九六三）に指摘があり、仮名文中の希望表現は「がな」「ばや」による助辞により表現されることが特徴である^{注10}。また、希望表現の形式について、稿者は、森脇（一九九四）で「実現を志向する」という点について、「もが」「てしか」を考察対象とし、希望表現を「詠嘆的希望表現」、「主体的希望表現」に分類し、次のような結果を得た。

「てしかな」は、上代に見られた、現実と掛け離れた詠嘆的希望表現という固有の用法は、中古になると「も」「だに」特に「いかで」と呼応し、対象に向けて積極的に実現を計りたい、という主体的希望表現が出現し、詠嘆的希望表現は衰退したと考えられる。これは、上代は言語主体の判断（希望）と心理（詠嘆）、両面をもち（＝詠嘆的希望）、中古以降、言語主体の判断（＝主体的希望）のみの用法に集約された、と考えられる。また、「てしかな」が希望対象をより限定するようになると、行為から対象へ、「てしかな」の希望の焦点が移行し、「対象的希望」である「もがな」と近似の性質を有するようになる。

希望表現形式について、「もが」「てしか」以外にも、森脇（一九九四）等で、「がな」、「かし」について考察を試みたことがあるが、本稿においては、『源氏物語』の「ばや」を取り上げ、考察することにする。これは、中世期以降「ばや」の意味用法は質的変遷を遂げたとする指摘があるためである^{注11}。

希望表現形式として「ばや」が如何なる変遷過程を経

希望の「ばや」用例表

作品名	成立年代	用例数	備考
竹取物語	(859?)	0	
古今和歌集	(905)	2	
伊勢物語	(900?)	0	
土左日記	(935)	0	
大和物語	(956)	2	
蜻蛉日記	(974)	8	
三宝絵詞	(984)	0	
落窪物語	(988)	8	
枕草子	(1002)	17	
源氏物語	(1008)	86	
紫式部日記	(1008)	2	
堤中納言物語	(1005)	22	
更級日記	(1060)	4	
栄花物語	(1060)	42	
大鏡	(1086)	7	
法華百座聞書抄	(1110)	0	
古本説話集	(1126~1201)	9	
詞歌和歌集	(1151)	4	
梁塵秘抄	(1169)	12	
三教指帰注	院政後期	2	
宇治拾遺物語	(1210頃)	19	
方丈記	(1212)	0	
保元物語	(1221)	9	
平治物語	(1221?)	30	
覚一本平家物語	(1309)	81	
徒然草	(1330頃)	4	
天草版平家物語	(1592)	7	
天草版伊曾保物語	(1593)	3	
大藏虎明本狂言集	(1642)	109	
きのふはけふの物語	(1624)笑話	0	
計		489	

るのか、「中古から中世へ」という日本語史的観点から、『源氏物語』中の「ばや」の意味用法を考察し、希望表現の一変遷に迫ってみたいと思う。

希望の助辞「ばや」の用例を表にして示すと次のようになる。

2-1、「ばや」の語性と「希望表現」

後世のロドリゲス『日本大文典』には、次のように「ばや」の語性を指摘している。

○未来にはBaya (ばや) に終る別の形がある。これは否定形のNu (ぬ) をBaya (ばや) に変へて作る。話しことばでは余り使はれない。普通には不定法の助辞To (と) か、tote (とて) かをそれに添へる。(略) quicabayatote (聞かばやとて) Quico tote (聞かうとて) と同意。

〔未来に就いて〕 51頁傍線稿者
また、『あゆひ抄』には、次のように「ばや」の語性を指摘している。

〔何(ばや)(何)は事(こと)の(あらまし)なり。里「夕イヅ」と言ふ。いたりて難き事を願ふにはあらで、事に当たりて、心にせまほしく・あらましきを、さもえせず・えあらぬに思ひ言ふ言葉なり。(略) かくのみよむべきを、をとつ世より始めて今の世には、ただ「とせむ」「か

くあらむ」などいふ言葉を「とせばや」「かくあらばや」とよむは、例の本の心を失へるなり。謡(うたひ)といふものに「一見せばやと思ふ」「行かばやと存ず」など言ふたぐひ、皆ををとつ世より後の誤りなり。

(巻一 願属(ねがいのたぐひ) 151、152頁)
『日本大文典』によれば、「話しことばでは余り使はれない」、即ち「書きことば」的な性格である、とある。確かに『日葡辞書』には「ばや」は採録されておらず、「話しことば」としての用法は、中世末から近世初頭にかけて、「書きことば」的な性格を強めていったのかもしれない、と考えられるが、「大蔵虎明本狂言集」には纏まった用例がみられ、「ばや」の出現においては「科白の小段」に集中するとの指摘があることから¹⁵¹、その語性については、更に考察を要すると思われる。

また、文中における「ばや」の出現位置について、終助詞ということからも、当然文末に出現することが予想されるが、「普通には不定法の助辞」。(と) か、tote (とて) かをそれに添へる」とある。これは、引用節中に出

現すること、「と」あるいは「とて」と「直接」承接する、ということであり、「聞かばやとて」と「聞かうとて」が同意であること、即ち「ばや」は意志形「う」と同意であること、を指摘している。よつてロドリゲス『日本大文典』は、「ばや」が、△「希望」から「意志」へ▽と質的に変容したことを指摘している、と考えられる¹⁾。

これに対して『あゆひ抄』では、「ばや」は「たいぞ」に相当すること、「とせむ」「かくあらむ」などいふ言葉を「とせばや」「かくあらばや」とよむは、例の本の心を失へるなり」とし、「む」と「ばや」は同義ではない、と指摘している。これを翻つていえば、このように指摘しなければならぬほどに、「む」と「ばや」とは同質のものとして当時把握されていたとも言えるであろう。これらの指摘は、「希望表現」と「意志表現」との関係において「ばや」の意味的な変遷過程を考察する上からも重要な指摘である、と考えられる。また『あゆひ抄』では、「ばや」を「いたりて難き事を願ふにはあらで」と指摘していることから、現実と乖離していない、実現可能な希望表現と捉えている点も、「現実不可能の性質

を持つ」との指摘がある。「しか」系の希望表現形式との関係において重要な指摘である、と考えられる。

2-2、「希望表現」と「意志表現」

「希望表現」と「意志表現」に関しては、次のような指摘がある。

希望表現は、話し手が、自分や他者による行為の実現を望んでいる、という気持ちを表出する表現である。(略)ここで、希望表現と他の表現分野との関係を見ておく。希望表現は意味的に意志表現と近い点を持つ。両者は、「実現を志向する意味を表す」(「意志形」の解説)という点で共通の性格を持っている。しかし一方、典型的な意志表現が、実現に向けて積極的に事態を引き起こそうとする姿勢を感じさせるのに対し、希望表現はあくまでも「望む気持ちの表出」にとどまっているという違いもある。(cf. 行きたくないけれども行こう)

〔「方言文法全国地図」第5集解説書 傍線稿者〕

この定義に従えば、「希望表現」と「意志表現」は、「実現を志向する意味を表す」で共通するが、「積極的」に事態を引き起こすのが「意志表現」であり、「表出」にとどまるのが「希望表現」となる^{注5)}。

また、「終助詞」として立項されている中で、希望の助詞について、次のような記述がある^{注6)}。

終助詞は、係助詞・副助詞・間投助詞とは異なり、それが述語の中でひとつのモダリティを形成する点がその特徴である。強調や情意性の助詞というよりも、ある意味で、活用しない助動詞（不変化助動詞）と見ることもできる。山田孝雄が、「この助詞どもはこれが附属するによりて陳述が完結するものにして之を除き去る時は文の精神を変ずることあるものなり」（『日本文法論』）としている通りである。「がな」「かし」「な」「なも」「ばや」等は願望を表すことにより、それが現実ではないというモダリティを表示できる。

（『日本語学研究事典』「終助詞」傍線稿者）

これは、「実現を志向する意味を表す」「望む気持ちの表出」という側面からの説明ではなく、「ばや」が「願望を表すことにより、それが現実ではないという」まさに「現実」からみた「判断」を示したもので、「実現」か「現実」かによる相違といえるのではないかと考えられる。

2-3、「ばや」の承接語

「てしかな」の承接語は次の通りである（森脇（一九九四）参照）。

※「てしかな」の承接語

あひ見る・あらず・あり・出づ・言はず・言ひ渡らふ・入る（四段、下二段）・得・浮かぶ・承りあらはす・承る・移す・うらみ聞かせ侍り・うらみ聞ゆ・思はる・かけさせ奉る・叶ふ・反す・聞かず・聞く・聞こえ知らす・聞こえ侍り・聞ゆ・聞し召さる・着初む・較ぶ・試みる・籠り居る・伐らる・御覧ぜさす・咲かず・し為す・し侍り・知らす・知られ奉る・す・せさす・せさせ奉る・た

ち離れ奉る・尋ぬ・告ぐ・伝ふ・留む・とひ見る・取り返す・取る・なす・なつく・なり見る・成る・寝・濡れみる・始む・晴るく・経・吹かす・踏みみる・任す・待ち出づ・参らす・参る・見出づ・見え奉る・見え直す・見す・見つく・見果つ・宮仕へす・見る・迎へとる・もてなす・止む・行き隠る・譲る・分く(下二段)・忘る

『源氏物語』中の「ばや」の承接語は次の通りである。

※「ばや」の承接語

あり・うち語らふ・語らふ・思ふ・思ひ離る・聞く・聞こゆ・聞こえ通ふ・見る・問ふ・慰む・知る・住む・なす・死ぬ・つく・作る・捨つ・馴れ仕うまつる・まうづ・添ふ・もてなす・抱きかしづく・ならふ・たてまつる・はべり・す(使役)・さす(使役)・ぬ(完了)・つ(完了)

このように異なり語数は、決して多くはないが、存在動詞「あり」から、動作動詞「つくる」等の用例が見られる。また、助動詞は、使役の「す」「さす」、完了の「つ」「ぬ」である。

この中で、用例数の多いものは、単独の動詞では、「見る」が12例で最も多く、「たてまつる」15例中「見たてまつる」が10例、他に「見る」系で助動詞等と承接した「見す」、「見せたてまつる」、「御覽ぜさす」、「御覽ぜさせたてまつる」、「見たてまつりぬ」をあわせると27例で全体の30%を占めることが大きな特徴である。

「ばや」承接語中で、「てしかな」にもみられた「あり」が、4例存する。

「用例1」紅の薄様に、あざやかにおし包まれたるを、胸つぶれて、(源氏)「御手のいと若きを、しばし見せてまつらであらばや。隔つとはなけれど、あはあはしきやうならんは、人のほどかたじけなし」と思すに、(略)

(若菜上(4) 65頁)

「用例2」(略)「ところせき身こそわびしけれ。軽らかなるほどの殿上人などにてしばしあらばや。いかがすべき。かうつつむべき人目も、え憚りあふまじくなむ。(略)」とぞのたまふ。

(浮舟(6) 126頁)

〔用例3〕(匂宮)「心よりほかに、え見ざらむほどは、これを見たまへよ」とて、いとをかしげなる男女もろともに添ひ臥したる絵を描きたまひて、(匂宮)「常にかくてあらばや」などのたまふも、涙落ちぬ。

(浮舟(6) 124頁)

〔用例4〕(略)かの人も思ひのたまふめるやうに、いにしへの御代りとなずらへきこえて、かう思ひ知りけりと見えたてまつるふしもあらばや、とは思せど、

(早蕨(5) 360頁)

〔用例1〕は、光源氏の心理文中の用例で、「宮の筆跡がまったく子供っぽく幼いのを、いましばらくは(紫の上)におみせしないでおきたいものだ」と、女三の宮の欠点を隠そうとする源氏の配慮が窺える場面である。〔用例2〕は、匂宮の会話文の用例で「身軽な身分の殿上人などにしばらくでもなつていたいのだ」と解釈でき、希望の対象が「にて」で示されている。〔用例3〕は、

匂宮の会話文中の用例で、「いつもこうしていたい」と解釈できる。〔用例4〕は、中君の心理文中の用例で、

新大系脚注には「(薫を)亡き大君の代わりとしてお思い申しあげ、このように感謝しているのだ、と(薫に)わかつていただく機会がないものかとは(中君は)お思になるが」とある。この用例は、希望の対象「ふし」が「も」で例示強調しているが、これら「あらばや」の用例は、現実とは相反し「実現不可能」な「それが現実ではない」状態である、と考えられる。したがって、これらの用例は、現実ではない状態であるが、そうありたいと望む気持ちの表出という点では共通している、と考えられる^{〔注〕}。

以下、用例に即してコメントする。

2-4、和歌中の「ばや」

『源氏物語』においては、和歌中に歌語として表れた「ばや」の用例は、全5例である。

〔用例5〕(五節)須磨の浦に心をよせし舟人のやがて朽たせる袖を見せばや

(明石(2) 264頁)

「用例6」さまざま思ひたまふに、御文あり。例よりはうれしとおぼえたまふも、かつはあやし。秋のけしきも知らず顔に、青き枝の、片枝いと濃くもみぢたるを、

(薫) おなじ枝をわきてそめける山姫にいづれか深き色とはばや

(総角(5) 247頁)

「用例5」は、他動詞「見す」に「ばや」が承接している用例で、当該箇所「新大系」脚注には、「須磨の浦で同情申し上げた舟人(私)が、その時以来絶えぬ涙で朽ちさせてしまった袖をあなたに見せたいものだ」とあり、「全集」には「袖をお見せしたいものです」とある。ここでは訳出語に「ものだ」が表れているが、相手に働きかけ、現実に対する判断を表示している、と考えられる。「用例6」は、他動詞「とふ」に「ばや」が承接している用例で、大君が、中の君を薫に取り持とうとしたことに対して、薫が姫君達以外の第三者には、具体的には分からないように、手紙にて大君に送った場面である。

当該箇所の「全集」には、「同じ枝の一方を紅に染め分けた山の女神(大君)に、どちらのほうが深い色なのかとお尋ねしたいのです。(ご姉妹のどちらをこの私はお思いしたらよいのでしょうか)」とあり、ここでの訳出語は「のだ」が表れているが、ここでも「ばや」は、現実に対する判断を表示している、と考えられよう。

「用例7」女君の濃き御衣に映りて、げに、濡るる顔なれば、

(花散里) 月影のやどれる袖はせばくともとめても見ばやあかぬ光を

いみじとおぼいたるが心苦しければ、かつは慰めきこえたまふ。

(須磨(2) 167頁)

「用例8」御硯なる紙に、

(明石の女御) しほたるるあまを波路のしるべにてたづねも見ばや浜のとまやを

御方も、え忍びたまはで、うち泣きたまひぬ。

(若菜上(4) 100頁)

〔用例9〕（浮舟）「かきくらし晴れせぬ峰の雨雲に浮きて世をふる身をもなさばや」

まじりなば」と聞こえたるを、宮はよよと泣かれたまふ。

（浮舟（6） 152頁）

〔用例7〕は、他動詞「見る」に「ばや」が承接している用例で、当該箇所「新大系」脚注には「月光が映っている我が袖はたとえ狭くとも、そのすばらしい光を留めていつまでも見ていたものだ。月を源氏にたとえる。」とあり、「全集」には「あなたをお引きとめしておきたいのです」とある。〔用例8〕も、他動詞「見る」に「ばや」が承接している用例で、全集「泣いていらつしやる尼君に、海路のご案内をさせていただき、私の生まれ故郷の明石の家を尋ねてみたいものです」とある。〔用例9〕は、他動詞「なす」に「ばや」が承接している用例で、薫と匂宮との間で揺れ動く大君が、薫の文を見、薫と匂宮とに返歌する場面で、当該箇所の「新大系」脚注には「雨雲にとちらとも定めなく世を過（すす）ごすこの身をなしたくないものよ」とあり、「全集」には「当てもなく

この世を過（すす）ごしているわが身を、まっ暗に晴れ間もない峰の雨雲に変えてしまいたいのです（雨雲の中に入っ（はいり）てしまえばお目にかかれませんかでしょう）」とある。

〔用例7〕〔用例8〕〔用例9〕は、「・・・も・・・ばや」形であり、『源氏物語』においては、全20例存する。このように訳出語に「ものだ」が出現するのは、「ばや」が、現実に対する判断を表示しているためであり、また、「も」により「ばや」の希望対象を例示強調している用例である、という共通項がある。〔用例9〕は「定めなく世を過（すす）ごす」よう「この身」を変えたい、と、現実からすれば実現可能性の低いものであるが、希望表現の「てしか（しか）な」の「詠嘆的希望表現」（上代に現実と乖離した直截的な希望表現形式）とは異なり、ここでは「も」によって希望対象を例示強調し、未然の事柄を実現しようという気持ちを表出している用法である、と考えられるのではないかと考えられる。（すす）

2-5、希望対象の強調「いかで」「かならず」「だに」

『源氏物語』中、和歌以外の「ばや」の用例を調査すると、「しか」系で見られた「いかで」「だに」を伴った用例が存している。「いかで」「だに」と希望表現との共起関係について、「いかで」は語構成に不定性を持ち、「だに」は未定状態・否定的既定事実を意味する語を承け、前出の「も」は、不確定性表現と呼応するという点においてこれらには共通項がある、と考えられる^(注9)。

まず、「いかで・・ばや」形について。「ばや」が「いかで」と共起することで、「ぜひとも。なんとかし」という積極性を表す、と考えられるが、山内洋一郎(二九六九)は、『源氏物語』の「いかで」を調査し、「ばや」はわずか2例であることを指摘した後、「しか」が『ばや』と異なるのはこの積極性、『む』に近い点にあると、いってよいのではないだろうか」とし、「ばや」には「積極性」という要素が「しか」に比べ弱いとの重要な指摘がある。確かに「てしかな」に占める「いかで・・てしかな」形は、『源氏物語』では約4割なのに対し、「い

かで・・ばや」形は、2例、2.3%にしか過ぎない。

「用例10」なほ、わが身を失ひてばや、つひに聞きにくきことは出で来なむ、と思ひつづくるに、この水の音の恐ろしげに響きて行くを、(略)

(浮舟(6) 159頁)

「用例11」(浮舟)「まろは、いかで死なばや。世づかず心憂かりける身かな。かくうきことあるためしは下衆なごの中にだに多くやはあなる」とて、うつぶし臥したまへば、(略)

(浮舟(6) 173頁)

「用例12」上も年ごろ御鏡にも思し寄ることなれど、聞こしめししことの後は、またこまかに見たてまつりたまうつつ、ことにいとあはれに思しめさるれば、いかでこのことをかすめ聞こえばやと思せど、(略)

(薄雲(2) 444頁)

「用例10」は、「他動詞「失ふ」+完了「つ」と「ばや」が承接し、「やはりこの身をなきものにしてしまいました」

という用例であるが、後続場面に「用例11」がある。「用例11」は「いかで：ばや」形の用例であり、「わたしは、どうにかして死んでしまいたい」と解釈できる用例である。ここでは自動詞「死ぬ」と「ばや」が承接しており、当該箇所「全集」頭注には「浮舟の嘆きと死への傾斜はまえにみえた（「用例10」のこと稿者補）が、ここはさらに強化された意思となっている」とある。「用例12」も、「いかで…ばや」形の用例で、冷泉帝の心中の用例であり、他動詞「聞こゆ」と「ばや」が承接し、「どうかして源氏が実の父であると知ったことをほめかし申し上げたいものとおぼしめすけれども」と解釈できる。「用例11」「用例12」共、「ばや」は「いかで」と共起し、「何とかして」「どうにかして」等、行為の実現に向けて、言語主体の積極的な姿勢、現実に対する判断を強調を「ばや」に読み取ることができる（「主体的希望表現」（森脇（一九九四））。また、「用例11」は「ばや」で文が終止するのに対して、「用例12」は、「ばや」で句は終止するが、引用節「と思せど」が後に続いており、現実は、そうではないという、希望している事柄の実現が困難であるこ

とを表している。

また、「ばや」が「かならず」と共起した用例「用例13」も存する。

「用例13」（薫）「さかし。いとさまざま御覧すべかめる端をだに、見せさせたまはぬ。かのわたりは、かく、いとも埋もれたる身に、ひき籠めてやむべきけはひにもはべらねば、必ず御覧せさせばやと思ひたまふれど、いかでか尋ねよらせたまふべき。（略）」など聞こえたまふ。

（橋姫（5） 146頁）

「用例13」は、薫の心理文中の用例で、「他動詞「御覧す」+使役「さす」と「ばや」が承接した用例である。この用例は「きつとごらんにいれたいもの」と存じているのでございますけれども」と解釈できる用例であるが、ここでは、副詞「かならず」と「ばや」が共起し、これは「ばや」が「いかで」と呼応することで「ぜひと。なんとかして」という積極性を表す、「主体的希望表現」と同質のものである、と考えられる。この「かならず」は「行

為が実行され、△判断が成立すること∨への、確言、強制、確信」を表し、また不確定性表現と呼応するという点でも「いかで」共通する、と考えられる。

さらに「だに」によって、希望の対象が限定されている用例がある。「源氏物語」中には4例存し、これらは、希望対象の限定によつて希望の実現可能性への働きかけをより鮮明にした「主体的希望」を表している、と考えられる(注10)。

〔用例14〕かの明石の舟、この響きにおされて、過ぎぬる事も聞こゆれば、知らざりけるよ、とあはれに思す。神の御しるべを思し出づるもおろかならねば、(源氏)「いささかなる消息をだにして心慰めばや。なかなかと思ふらむかし」と思す。

(濤標 (2) 296頁)

〔用例15〕(柏木)「北面だつ方に召し入れて、君達こそめざましくも思しめさめ、下仕などやうの人々とだにうち語らばばや。またかかるとやうはあらじかし。さまざまにめづらしき世なりかし」と、うち傾きつつ、恨みつつ

けたるもをかしければ、かくなむと聞こゆ。

(藤袴 (3) 333頁)

〔用例16〕右近はた、かしがましく言ひ騒がれんを思ひて、君も今さらに漏らさじと忍びたまへば、若君の上をだにえ聞かず、あさましく行く方なくて過ぎゆく。君は夢をだに見ばやと思しわたるに、(略)

(夕顔 (1) 267頁)

〔用例17〕なかなか異方の姫君は、見えたまひなどして、例のはらからのさまなれど、童心地に、いと重りかにあらまほしうおはする心ばへをかひあるさまにて見たてまつらばや、と思ひ歩くに、春宮の御方のいとはなやかにもてなしたまふにつけて、同じ事とは思ひながらいと飽かず口惜しければ、この宮をだにけ近くて見たてまつらばや、と思ひ歩くに、うれしき花のついでなり。

(紅梅 (5) 46頁)

〔用例14〕は、光源氏の心理文中の用例で、他動詞「慰む」に「ばや」が承接している用例である。「(源氏は)せめて一言の便りだけでも遣わして(明石の君の)心を

慰めてやりたい」と解釈できる用例で、「いささかなる消息」と対象を限定している、と考えられる。「用例15」は、宰相の君が玉鬘に柏木の言葉伝える場面で、他動詞「うち語らふ」に「ばや」が承接している用例である。

この用例は「せめて下仕えなどのような人々ともお話
がしたい」と解釈できる。また、「用例14」「用例15」は、
後続句に終助詞「かし」が存しており、これによって、
話し手の決意、心情を表現している、と考えられよう。

「用例16」は、光源氏の心理文中の用例で、他動詞「見
る」に「ばや」が承接している用例で、「源氏はせめて
夕顔と夢でも逢いたいと思ひ続けて」と解釈できる用
例である。「用例17」も心理文中の用例で、「他動詞「見
る」+「奉る」に「ばや」が承接している用例である。
当該箇所「全集頭注」に「句宮を宮の御方の夫にして
身近にお世話したい」とあり、「新大系」脚注には「(帝
や東宮はだめでも)せめて句宮なりと婿君として身近に
拝見したい。」とある。

以上のように、「・・・だに・・・ばや」形は、「だに」
が希望の対象を限定することによって、対象に向けて積

極的に実現を計りたい、という主体的希望表現を表して
いる用例である、と考えられ、現実に対する判断を表示
している、と考えられる。

「用例18」冷泉院の一の宮をぞ、(句宮)「さやうにても
見たてまつらばや。かひありなんかし」と思ひたるは、
母女御もいと重く、心にくくものしたまふあたりにて、
姫宮の御けはひ、げにとあり難くすぐれて、よその聞こ
えもおはしますに、(略)

(句宮) (5) 22頁

「用例19」(妹尼)「いとよきに、あらまほしくもねび
まさりたまひにけるかな。同じくは、昔のやうにても見
たてまつらばや」とて、(略)

(手習) (6) 297頁

「用例20」(薫)「さる方にも御覽せさせばや、と思ひ
たまへし人になん。おのづからさもやはべりけむ、宮に
も参り通ふべきゆゑはべりしかば」など、すこしづつ
色ばみて、(略)

(蜻蛉) (6) 211頁

「用例18」は、句宮の心理文中の用例で、「用例17」と同じく「他動詞「見る」＋「奉る」に「ばや」が承接している用例である。ここでは「このお方の婿となつてでもお逢いしたいものだ」と解釈できるが、「用例17」の「だに」ではなく、ここでは、「にても」によって、希望対象を例示強調している。「用例19」も、「他動詞「見る」＋「奉る」に「ばや」が承接し「同じことなら昔と同じようにお世話申しあげたいものです」と言つて」と解釈できる用例である。また、ここでは「ばや」と「とて」が承接しており、後世、『日本大文典』で「普通には不定法の助辞」の「か、*ka*（とて）かをそれに添へる。」とあり、「ばやとて」が多用されたことがわかるが、『源氏物語』中の「ばやとて」は、この用例のみである。「用例20」は、「他動詞「御覧す」＋使役「さす」と「ばや」が承接した用例であり、「用例9」「必ず・・ばや」形と同質であると考えられる。

このように「ばや」は、「いかで」「かならず」「も」「に」なども「」などと共起することによって、言語主体の希望

内容の実現に向けて積極的に実現しようという姿勢を表す、主体的希望表現用法が存している。

3. 「ばや」の出現位置

最後に、「ばや」の文における出現位置について考察したい。「ばや」は「終助詞」という性格からして文末に出現するが、『源氏物語』では、後続句がなく、「ばや」で文が終止するものが86例中22例(25.5%)である。一方、『日本大文典』に指摘された「と」「とて」が承接し、引用節に続く用例は、「ばや＋と」50例(58%)、「ばや＋とて」1例、「ばや＋など」12例(14%)であり、『源氏物語』では、「ばや」の7割を占める。後の『日本大文典』の記述からすれば、「と」「とて」等と直接承接しない、「ばや」単独で文終止する用法が存することが、中古の「ばや」の特徴である、とも考えられるであろう。

さらには、「用例21」のように、「ばや」節を「の」で包摂する用例が見られる。

〔用例21〕(略) わが身つらくて、尼にも|なりなばやの御心つきぬ。

(柏木 (4) 291頁)

〔用例21〕は、女三の宮の心理を表現する場面で、「自動詞「なる」+完了「ぬ」と「ばや」が承接した用例であるが、「も」によって希望対象が例示強調され、「女三の宮はいっそ尼になってしまいたい」と解釈できる用例である。ここでの「ばや」は、「の」と直接承接し、「ばや」句が連体修飾語として、その実質的な内容を示していると考えられる。これは、「ばや」が「の」と直接承接することが許容されるほど、「ばや」句の動作性が希薄化し、「ばや」句が体言相当として「御心」を修飾し、その事柄を表示する、と考えられるであろう。

〔用例22〕(薫)「八などて、年ごろ、見たてまつらばや、と思ひつらん」。なかなか苦しいかひなかるべきわざにごそ」と思ふ。

(蜻蛉 (6) 240頁)

〔用例23〕ものの情知らぬ山がつも、花の蔭にはなほ休らはまほしきにや、この御光を見たてまつるあたりは、ほどほどにつけて、わがかなしと思ふむすめを仕うまつらせばやと願ひ、もしは口惜しからずと思ふ妹など持たる人は、いやしきにも、なほこの御あたりにさぶらはせんと思ひよらぬはなかりけり。

(夕顔 (1) 223頁)

〔用例22〕は、薫の心理文中の用例で「用例17」と同じく「他動詞「見る」+「奉る」に「ばや」が承接している用例で、「新大系」脚注に「どうして長年(女一宮の)お姿を拝見したいなど思っていたのだろう」とあり、「全集」頭注には、「薫は年来、女一の宮に憧れながら遂げられぬ恋を嗟嘆してきた」とある。ここで疑問の副詞「など(て)」は、述語「思ひつらん」を修飾すると考えられる。したがって、「ばや」句は、「思ひつらん」コトの実質的な内容を表示している、と考えられる。〔用例23〕は、「自動詞「仕うまつる」+使役「す」と「ばや」が承接した用例で、「源氏の君の輝くお姿を拝見す

る人は、いとしく思うわが娘をお仕え申し上げたいと願
い」と解釈できるが、「ばや」句が承接する引用節は「と
願ふ」であり、希望内容を直接的に表示する「願ふ」と
いう動作に対して、「ばや」は、「思ふ」コトの内容を表
示する、と考えられるであろう。

〔用例24〕 さかしく思ひしづむる心もうせて、いづちも
いづちも率て隠したてまつりて、わが身も世に経るさま
ならず、跡絶えてやみなばや、とまで思ひ乱れぬ。

(若菜下(4) 217頁)

〔用例24〕は、「自動詞「やむ」+完了「ぬ」に「ばや」
が承接し、「とこそへ姿をくらましてしまいたいものだ、
とまで思い乱れるのだった」と解釈できる用例である。
このように「ばや」と「と」に「まで」、他にも係助詞「な
む」が介在する用例も見られ、『源氏物語』においては、「ば
や」と「と」との関係は、全体としては、7割を占める
が、後の『日本大文典』に指摘された時に比べて、相対
的に未だ独立した関係である、といえるであろう。

4、おわりに

以上、『源氏物語』中の「ばや」の意味用法を考察し、
次のような結論を得た。

- ・「ばや」は「現実」に対して、未然の事柄を実現しよ
うとする事態の判断を表示する。その場合、現実はその
うではない、という事態もある
- ・「ばや」と承接する助動詞は、完了「ぬ」「つ」、使役「す」
「さす」である。
- ・「ばや」と承接する動詞は「見る」系が約3割を占める。
- ・「ばや」の希望対象を例示強調する用法（「も」「だに」
等）がある。
- ・後続句がなく、「ばや」で文が終止する、中古の独自
用法は25.5%で少数である。
- ・引用節「と」「など」と承接する用例が73%で中古か
ら多数を占める。
- ・引用節「と」「など」と承接する「ばや」は、希望対
象の内容を表示する機能がある。

他の作品中の「ばや」について、「まほし」等、他の語形との比較は、稿を改めて考えたい。ご教授賜れば、幸いである。

〔尚、『源氏物語』本文は、小学館『日本古典文学全集』に依った。また岩波書店『新日本古典文学大系』を参照した。中田祝夫・竹岡正夫『あゆみ抄新注』(一九六〇)〔風間書房〕、土井忠生訳『ロドリゲス日本大文典』(一九五五)〔三省堂〕に依った。また必要に応じ表記を改めたところがある。〕

(注)

〔注1〕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(昭38 東京大学出版会)。

〈和文〉

〔A〕話手自身の願望

- (イ)「がな」(ロ)「ばや」
- (ハ)「まほし」(ニ)「む」

〔B〕他に対する願望

- (イ)「なむ」(ロ)「む」

〈漢文訓読文〉

〔A〕話手自身の願望 (イ)「ム」

- (ロ)「ネガハクハ…セム、セジ、ムコトヲ」

ムコトヲ

- (ハ)「コフ…セム」

〔B〕他に対する願望 (イ)「ネガバクハ…セヨ、命令形」

- (ロ)「ネガバクハ…ベシ」

森脇(一九九四)でも指摘した。

〔注2〕山内洋一郎(一九六九)参照。「ばや」は願望

の直接表現ではなく、心情の説明の中へ交代してゆく。室町時代の口語資料に見る「ばや」はすでにきわめて限られた文語的用法になっているのである。意味も「む」「う」に近くなっている。との指摘がある。

〔注3〕村上昭子(一九九三)『大蔵虎明本狂言集』における終助詞「ばや」について(『小松英雄博士退官記念 日本語学論集』三省堂)参照。

〔注4〕「ばや+と」は、意志推量の助動詞「む」と助辞「と」

が直接承接した連語「むとす」形が想起され、興味深い。

〔注5〕『方言文法全国地図』第5集解説書 54頁。希

望表現形式の史的変遷過程からしても「行きたいなあ」

(227図) と共に「行きたいなあ」(228図) と詠嘆の終助詞が承接している点、史的変遷過程からしても大変注目される。

(注6) 『日本語学研究事典』(明治書院)「終助詞」435頁。

(注7) 「あらばや」が「それが現実ではない」、「実現不可能」なのに対して、「あらまほし」の関連については、別稿を期したい。

(注8) 「実現可能」「実現不可能」の判断基準については、さらに考察を必要とするが、『源氏物語』からすれば、その後の浮舟の行動からして、実現不可能、と直裁的には考えられない。「てしかな」については森脇(一九九四)参照。

(注9) 加納協三郎『だに』『すら』の用法上の差異について(『国語と国文学』15—6 昭13)、工藤美紗子「へも」という助詞の意味(『文学』31—12 昭38)等参照。

(注10) 但し「しか」形で見られた「だに」と「も」が複合した「・・・だにも・・・ばや」は、『源氏物語』

中に見られない。

(参考文献)

・森脇茂秀(一九九四)「希望表現の一形式―助辞「も」が「てしか」形を中心に―」(『山口国文』17)

・(一九九九)「終助辞「かし」をめぐって」(『山口国文』22)

・(二〇〇〇)「希望の助辞「もがな」「がな」をめぐって(一)」(別府大学国語国文学)42)

・(二〇〇一)「希望の助辞「もがな」「がな」をめぐって(二)」(『山口国文』24)

・土井忠生訳(一九五五)『ロドリゲス日本大文典』(三省堂)

・山内洋一郎(一九六九)『古典語現代語助詞助動詞詳説』(学燈社)

・国立国語研究所(二〇〇二)『方言文法全国地図』第5集解説書

・『日本語学研究事典』(二〇〇七)(明治書院)